

【問題】（演習）

出典：『大和物語』一六九段／東北学院大学・改

現代語訳

昔、内舎人であった人が、大三輪神社の神様にささげものをするための使者として、大和の国へ下った。井手という（里の）あたりで、すつきりと整えられた人家から、女たちや子供たちが出て来て、この（大和へ）行く使者を見ていて。こぎれいな女が、たいそうかわいらしい様子の（女の）子を抱いて、門の所に立っている。この子供の顔がたいそうかわいらしい様子だったので、（その使者の男は）目を止めて、「その子を、こちらへ連れて来なさい」と言ったので、その女は（子供を連れて男の所へ）近づいた。近くで見ると、（その女の子は）たいそうかわいらしい様子だったので、（男は）「決してほかの男を夫になさるなよ。私と結婚なさるように。大きくおなりになるころに（迎えに）参上しよう」と言って、（また男は）「これを（自分を）思い出すよすが〔＝身代わり〕になさるよう」と言つて、（自分のしていた）帯をほどいて（その女の子に）与えた。そして、（男は）その子のしていた帯をほどいて自分のものとし、持っていた手紙を結び付けて（従者に）持たせて去つた。その（女の）子は、六、七歳くらいの年齢であった。この（使者の）男は、色好みであった人なので、（このように）言う〔＝結婚を申し込む〕のであつた。このことをその（女の）子は忘れずに心にとどめていた。（一方の）男は（このことを）とっくに忘れてしまっていた。こうして七、八年ほど（の歳月が）経つて、また、（男は）同じ使者に任命されて、大和に行こうとして、井手の（里の）あたりに宿泊していて（あたりを）見ると、前に井戸があつた。そこで水を汲む女たちがいて言うには、

山城の……山城の（國の）井手の（その井戸の）清水を手でもすぶ〔＝汲む〕ようにして手飲みした〔＝手で飲んだ〕、ではないけれども、契りを結び頼りにしたのに、その甲斐もない（男女）二人の仲であることよ

問1 ①||うどねり（うちのとねり・うちとねり） ②||やまと ④||かど

③||（イ） ⑤||（カ） ⑥||（イ） ⑦||（ア）

問2 ③||（イ） ⑤||（カ） ⑥||（イ） ⑦||（ア）

問3 (a)||たて (b)||ゐ (c)||いぬ

問4 A||決してほかの男を夫になさるなよ。

D||（以前と）同じ御幣使に任命されて「いざれも解答例」

問5 A||ゆいのう B||結婚

問6 (イ)

問7 (ア)||○ (イ)||× (ウ)||×

問8 (エ)||× (オ)||×

現代語訳

(陰曆一月) 十九日。天候が悪いので船を出しません。

二十日。きのうと同様〔＝悪天候〕なので、船を出しません。一行の人々はみな嘆いてため息をつきます。やりきれず、じれったいで、ただこれまで経った日数を、「今日で何日経った」「二十日たった」「三十日たった」と（あまりにも多く）数えるので、（数えるために何度も折った）指もきっと今にもいたんでしょうに違ひありません。本当につらいことです。夜は寝ることもできません。（気がつくと）二十日の夜の月が出てしまっていました。（まわりは海で）山の稜線もないで、海の中から（月は）出て来ます。このようないい光景を見てのことでしょうか、むかし、阿倍仲麻呂といった人は、唐の国に渡って、（その後、日本に）戻つて来る時に、乗船予定の地で、あちらの（唐の）国の人々が送別の宴を開き、別れを惜しんで、あちらの国の漢詩を作つたりなどしたそうです。名残惜しく思つたのでしょうか、二十日の夜の月が出るまで（そこでそろして宴を続けて）いたそうです。その月は海から出たそうです。それを見て、仲麻呂様が、「わが（日本の）国では次のような歌を、神代以来、神もお詠みになり、現在では、上・中・下のどんな身分の人も、このように別れを惜しんだり、うれしいことがあつたりする時には詠むのです」と言つて詠んだ歌は、青海原……青々とした海原を遙か遠く眺めると、（ここに出ているあの月は私の生まれ故郷である）春日にある三笠の山に出ていた月（と同じ月）なのだなあ

と詠んだそうです。あちらの（唐の）国の人々は、（この和歌を）聞いて理解することはできないだらうと思われましたが、歌の意味を、漢字で、だいたいの内容を書き出して、こちらの（日本の）言葉を習い覚えている人に教え聞かせたところ、その心情をわかつたのでしょうか、全く意外にも感動したということです。唐の国との（日本の）国とでは、言葉は異なるものだけれども、月の光は同じものであるのに違ひないので、（それを見る）人の気持ちも同じものなのでしょうか。さて、今、その（仲麻呂の）頃を思いやつて、ある人〔＝筆者、紀貫之〕の詠んだ歌は、

都にて……都では（出るものに入るのも）山の稜線に見た月であるけれども、（海では、月は）波から出て、波の中に入つていくこ

とだよ

解答

問1 ①||とをかあまりここぬか（とおかあまりここぬか）
⑤||言
⑥||異

問2 ②||送別の宴
③||上・中・下の、全ての身分の人
④||漢字
⑦||月の光

問3 (a)・(e)

問4 多い日数を数えて何度も折ったために、指がいたんでしまいそうだ、ということ。〔解答例〕

数えるために折った指がいたんでしまいそうなほど、日数を多く過ごした、ということ。〔別解例〕

問5 (2)||唐の国のは、阿倍仲麻呂との別れを惜しみ足りなかつたのであらうか、

(3)||（唐の国のは、）仲麻呂の和歌を聞いて理解することはできないだらうと思われたけれども、「いざれも解答例」

問6 (4)||イ
(5)||エ

解説

問1 語句の読みと漢字の問題。読みでは、記憶しておくべき古文特有語の読みの他に、現代語と同じでも普通の読みとは異なるものが題される。①「十九日」は普通に音読みすれば「じゅうくにち」であるが、それならば設問とはならない。「枕草子」や「源氏物語」などのような平安時代のふつうの古文は、「訓読み」で読むのが基本である。もちろん「中宮（チュウゴウ）」「更衣（コウイ）」といった官職名など、「音読み」の言葉もあるが、それはむしろ例外的なものであり、現代語の感覚でいうと「外来語」的イメージの言葉であつたはずである。読みを問われた場合にも、まずは「訓読み」の可能性を考えてみるとよい。数では「イチ、

ニ、サン、シ、ゴ、ロク、シチ、ハチ、キウ、ジュウ……」というのが音読みであり、「ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつ、むつ、ななつ、やつ、ここいつ、とを……」というのが訓読みである。「十九日」は「十日・+・九日」と考えて、「とおか・あまり・ひとひ・ここぬか」と読む。同様にたとえば「二十五日」なら、「はつか・あまり・いつか」、「十一日」なら「とをか・あまり・ひと立ち」の転)、「三十日」を「みそか」、また月末を「つごもり(=「月籠り」の転)」と呼ぶことも記憶しておこう。^⑤^⑥は、意味を考えて漢字をあてる設問。「こと」という語は広い意味を表すが、「事」・「言」／「異」・「殊」などのように、漢字をあてることで区別できる。^⑤は、その前後で日本と「唐土(=中国)」との「言葉」の違いを述べていることから「言」がふさわしい。^⑥の方は、現代語の動詞「異なる」と同様の意味の、「異なり」という形容動詞の一部になつており、「異」の字をあてることができ。なお、「言靈(ことだま)」という語があるように、古代人は「事(=ものごと)」と「言(=ことば)」を明確には区別しなかつたが、しだいに「こと」＝「事」という見方に傾いていき、「言」の方は別に「ことば」と呼ぶようになつていったことを覚えておこう。

問2

語句の意味の問題。国語の問題では単純な知識だけの設問というのは少ない。この場合も、単に知識だけで答えず、前後の文脈を考慮して意味を考える必要がある。^②「むまのはなむけ」は、漢字をあてると「馬の鼻向け」。「はなむけ」は「餞」とも書き、関連して「餞別(せんべつ)」などという熟語もある。もともとは旅人の乗る「馬の鼻」を、行き先に「向け」て旅の無事を願つたことからきた言葉だが、実際には旅立つ人に金品を送つたり宴席を設けたりすることをいう。「馬」とは直接関係しないことに注意しよう。本文の場合は、傍線部の後に「……うた作りなどしける……」十日の夜の月出づるまで(=夜十一時頃)ぞありける」とあることからも、これは「宴会」だろうということがわかる。なお、現在では「卒業」や「結婚」など、広い意味での旅立ち一般に「はなむけ」「餞別」と用いる。^③も漢字をあてる発想で考える。傍線部の直前からの「神も……かみなかしの人も……」という文脈も判断材料になる。つまり、「神」という最高の存在から始めて「神も……しもの人も」という言い方をしているので、要するに「全ての身分の人」という解釈ができる。^④は古典常識でもあるが、和歌を唐の人に理解できるように「男文字」に書いたと言うのであるから答えは「漢字」である。漢字のことを「男手(をとこで)」ともいうので注意したい。逆に「女手(をんなで)」「女文字」といえば「真名(まな)＝漢字、漢文」よりは劣るとされた「仮名(かな)」と言う意味である。^⑦古文

での「かげ」という語は、暗い「陰」よりもむしろ明るく見える「光」「姿」の意味で用いる場合が多く、多く「影」の字をあてる。現在でも「面影」「人影」などなどと「姿」の意味である。

問3 動詞の種別の問題。動詞を述語とする文型にはいくつもあるが、まずは「①何が《主語》・②何を《目的語》・③どうする《動詞》」の形にあってはめて考えてみるとよいだろう。《他動詞》か《自動詞》かを区別するには、《目的語》を示す助詞「を」をつけて言えるか否かで判断する。古文で《他動詞》なら現代語でも《他動詞》か《自動詞》なので、現代語の感覚で考えてもよい。ただし古文では《目的語》を示す「を」は省略される方が普通であり、また、同じ動詞でも用法によって自動詞・他動詞に分かれる場合もある（たとえば「笛吹く」なら「笛を吹く」だから他動詞、「風吹く」なら「風が吹く」だから自動詞）ので注意する。(a)は「船を・出さず」、(e)も「歌を・めづ」と考えられるので他動詞である。それに対し、(b)は「日が経(ふ)」、(c)は「月が出づ」、(d)は「人が来て(く)」であり、「を」のつく目的語を指摘できないので自動詞である。ただし、「を」のつく場合には、「空を・飛ぶ(=自動詞)」のような例外もある。

問4 内容説明問題。説明問題でも、まずはきちんとした傍線部の直訳をつくることが大切である。助動詞部分「ねべし」は「キット……ニチガイナイ」といった意味になる。一般に《完了》の助動詞「つ」「ぬ」が《推量》の助動詞と組み合わさると、「キット」と訳す《確述》の用法になる。傍線部の直訳は「きっと指も傷んでしまうに違いない」となるが、設問は「どういうことを言つていますか」と内容説明を求めてるので、それに合わせて「……ということ。」の形にまとめる必要がある。本文冒頭から「船出ださず……船出ださず……ただ日の経ぬる……」などと、悪天候で何日も船出できないことを嘆いている。つまり「指もそこなはれぬべし」とは、何日も何日も待たされるつらさを強調した言い方があるので、直訳をベースに「多くの日数」という要素を入れて「……ということ。」に準ずる形式でまとめればよい。

問5 条件付きの現代語訳問題。これも直訳がその元になる。設問のいう「必要な要素」とは、「誰が（主語）・何を（目的語）……」というような補足すべき内容で、それぞれの述語によって決まってくる。難しく考えずとも、現代語の感覚で直訳を読んでみて、「足りない」と感ずる要素を補つていけばよいのである。たとえば、単に「見た。」とだけ言われたら、事情を知らない限り「何

を？ → いつ？ → どこで？……」といった順で聞きたくなるであろう。つまり「見る」という述語にはこうした要素が必要なのである。さて、(2)の「あかず」は「飽か／ず」で「足りない、満足しない」という意味。「や」は《疑問》の助詞なので、「足りなかつたのだろうか」が直訳である。しかし、これだけでは言葉足らずであり、「何が」足りないのか、「誰が」足りないというのかの要素を補う必要があるのであるだろう。これらを文中から求めて、「唐の国人人は」、「別れを惜しむことが」などと補ってまとめる。(3)は「まじく」が《不可能》を表す助動詞で、「聞いて理解することができないと感じたけれど」という直訳ができる。これを元に、「誰が（は）」・「何を」にあたる内容を補ってまとめる。いずれにしても、元となる直訳ができないことにはよい答案はつくりようがない。特に「ず」「けむ」(2)、「まじ」「たり」(3)のような助動詞の知識は最も必要性が高いので、確実に身につけなくてはならない。

問6 指示内容説明の問題。《指示語》を直接問う設問では、いくつかにとれる紛らわしい箇所を問うので、何となくで決めずに、複数の可能性を吟味して決める姿勢が大切である。(4)「ここの言葉」は、傍線部の前に「かの国人……」とあり、また傍線部の後に「唐とこの國とは……」とある文脈に注目したい。つまり、「かの國」＝「唐」、「この國」＝「日本」と表しているのである。そもそも「か」は、現在の「こ・そ・あ・ど」の指示語体系の「あ」にあたるもので、離れたものを指示する。「かの国人」には和歌は「聞き知るまじ（＝ワカラナイ）」と言われているのだから「唐土の人」を指す。とすれば、対応する「ここの言葉」は、「この國」＝「日本の國」の言葉だということになる。「日本」を示す選択肢のうち、(工)の「和歌の心」は、傍線部の終り方が「……言葉」であるのに「……心」としている点が不適当である。(5)は「当時」という漢字があててある点がヒントになるが、場面の違いに注目して、大きく文章の構成を見るとよい。この場合、本文4行目で「むかし……」と時間をさかのぼって、阿倍仲麻呂の逸話に話を移し、12～13行目で「さていま、……」と再び現在の場面に時間を戻すという「現在→過去→現在」の構成になっている。そして「いま（＝現在）、当時（＝過去）を思ひやりて」同じ「月」を詠んだのだから、正解は(工)「阿倍仲麻呂のころ」がふさわしい。

●
メ
モ
●

【添削課題】

出典：鷺田清一『ひとはなぜ服を着るのか』／福井県立大学

文章略解

現代社会では人間の核である〈顔〉は顔面にあらわれると考えられているため、現代人は常に顔面を露出している。これによつて他人に対しても同じ秩序を共有しているという意志表示をし、他人との関係を持つ。ところが現代の広告や雑誌などに氾濫する顔の画像群は、〈顔〉の現象ではなく記号の現象である。なぜならここには、顔の最も本質的な特性である相互的関係が欠落しているからである。現代人が関心を持つ〈顔〉とは、記号としての顔ではなく、そこで失われてしまった個別性を持つ〈顔〉なのである。

解答

問1 (ア)＝瞬間

(イ)＝ただよ(つて)

(ウ)＝いつわ

(エ)＝はんらん

(オ)＝磁力

問2 1＝(イ)

2＝(オ)

3＝(ア)

4＝(ウ)

5＝(エ)

問3 人格の座／存在の核

問4 個別性を持たないためにイメージとして類型化できてしまい、他者に影響を与えるような相互的関係を形成することがなく、見られるという一方的な関係しか作りあげないものである（と言ひ表している）。

問5 (エ)

特別問題

現代社会では、人間の核である〈顔〉は顔面にあらわれると考えられているため、現代人は常に顔面を露出している。これにより他者に対する同じ秩序を共有していることの意志表明をし、他者との関係を持つ。ところが現代のメディアに氾濫する顔の画像群は、〈顔〉ではなく記号の現象である。それは一方的な、見る—見られるの関係で、〈顔〉が果たす相互的関係が欠落している。本質的に顔は関係のなかにあるので、一方的な関係では自足できない。現代人は、記号としての顔ではなく、記号では失われた個別性を持つ〈顔〉に関心を持つ。〔三四七字〕

【問題】(自習)

出典：山岸美穂・山岸健 「音の風景とは何か」／島根大学・04年

文章略解

自然と人間との関係について、ミヒヤエル＝エンデは、文明の進歩の中で人間が自然を感じる感性を失つてしまつたと指摘し、自然との内的な関係を保つことが重要だと述べる。宮崎駿も、人間が自己中心的見方にとらわれて謙虚さを失い、他の生物や自然環境への細やかな配慮をなくした結果、人間が暮らすこと 자체が自然を破壊することになるという深刻な問題を提起した。サン＝テグジュペリは、一人ひとりが世界の建設に加わっているという自覚が人生に意味をもたらすのだと指摘する。今や人間関係も稀薄化し様々なレベルで感性の荒廃が進んでいる。現代を生きる人間は、過去を再考しこれからの時代を深い相互理解に基づいていかに創造するかを考えねばならない。

解答

問1 1＝驅使 2＝謙虚

問2 現代人は、物質的には文明的生活を営んでいるが、精神的には自然との内的関係が忘れられ自然を感じる感性が荒廃しているといふこと。[〔解答例〕](#)

問3 環境問題を、自然そのものを尊重する視点ではなく外部から利用する人間の利益の視点でしか見ない捉え方。[〔解答例〕](#)

問4 文明の進歩の中で、人間は次第に自己中心的で傲慢となり他の生物や自然環境に対する配慮を失つた結果、今や人間が生活すること自体が自然を破壊するという事態になってしまったこと。[〔解答例〕](#)

問5 人間は自然との内的な関係を保ち、それぞれが世界の建設に加わっているという自覚を持つことで人生の意味を見出していたが、文明の進歩の中で自己中心的な見方にとらわれ、自然を感じる感性と生きることの意味を見失ってしまった。〔解答例〕

解説

問1 漢字書取の設問。1 「駆使」は「(機能・能力などを) 思いのままに自由自在に使うこと」。「驅」は「かる」と訓読みし、もともと「馬にむちをあてて速く走らせる」意の字で、他に「駆逐」「駆動」「疾駆」などの熟語がある。2 「謙虚」は「傲慢」の対義語で、「自分を低いものと見て、おごりたかぶらずに控え目にましくする様子」をいう。

問2 比喩表現説明の設問。『モモ』の言葉の引用である「心臓はちゃんと生きて鼓動している」のに「なにも感じとれない」を、前後の関係表現を元に平易に言い換える説明すればよい。傍線部の主語にあたるものまとめると、「文明の利器に囲まれながら時間に追われ静けさが不安で耐えられず大都会を騒音で一杯にしているような現代人」だということになる。ここで「心臓はちゃんと生きて鼓動している」とは、要するに文明を進歩させ大都會を構築し物質的には着々と進歩していることを指すだろう。一方、「なにも感じとれない」とは、傍線部の次の文に「何も感じとれない、心のない人間」になってしまった、次の段落に「自然そのものが生きた存在であることを尊敬し、自然に対しても本当に内的な関係を持たなければならない。エンデは自然と人間の関係を考えるためにあたり、人間が自然を感じる力を重視した」とあるように、精神的には感性が荒廃してしまったことを指すとわかる。以上を文字数を考慮してまとめる。

問3 内容説明の設問。「経済的・実用的観点」は、辞書的には「損得利益や、実際に役立つか否かを重視する捉え方」と説明できるだろう。傍線部の場合直前の具体的な「地球の気候を守るために……」という部分が、エンデが批判的に述べる「経済的・実用的観点」にあたるはずである。この論理は裏返せば「もし地球の気候が守られるなら、アマゾンの熱帯原生林は破壊しても構わない」という論理に通ずる。一方、傍線部直後には「自然そのものが生きた存在であることを尊敬し、自然に対しても本当に内的な関係を持たなければならない」とある。要するにここでの「経済的・実用的観点」とは、自然そのものを尊重するのではなく、あくまで自然を利用する人の都合で功利的に自然環境を捉える在り方を指していることが読みとれる。これらを「環境問題」に關係

づけて、「観点」を言い換えた「……捉え方。」の形式にまとめる。

問4 内容説明の設問。「こうした宮崎の見解と彼の映画作品」が私達に「深刻な問題」を提起しているのだから、宮崎駿の「見解」と「映画」についての記述を検討して考えるが、特にインタビュー部分で「人間がつましく暮らしている分には自然と共存できて、少し欲張るからだめになるということではなくて、暮らしていること 자체が自然を破壊しているという認識に立たないと、環境問題も自然の問題も解決できない」とあることに注目する。要するに、文明の進歩によつて人間が自己中心的で傲慢となつた現代では、環境に配慮すればよいという従来の自然保護的観点はもはや通用せず、そもそも人間が「暮らしていること 자체が自然を破壊している」という認識が不可欠になつてしまつたとの指摘である。これが従来とは異なる「深刻な問題」の中身であるので、これを論旨の流れに即してまとめる。

問5 内容説明の設問。人間が得たものは文明の進歩に代表される物質的な経済的・実用的成果であろう。一方設問が要求する「人間が失つてしまつたもの」は最終段落で筆者も「感性の荒廃」と指摘するように、精神的な側面・心の問題である。この点を、「エンデ」と「サン＝テグジュペリ」の考えに即して詳述する。まず、エンデは「自然そのものが生きた存在であることを尊敬し、自然に対しても本当に内的な関係を持たなければならない」と述べ、さらに「人間が自然を感じる力」を重視したとある。ここから、①「人間が自然の内的な存在であることの自覚と自然を感じる感性を失つてしまつた」とまとめると、一方、サン＝テグジュペリは「人々が人生に意味を導き入れながら生きることの重要性」を指摘し「人間であるということは、自分の石をそこに据えながら、世界の建設に加担していることだ」と述べている。ここから、②「人間が世界の建設に加担しているという自覚が生み出す人生の意味を失つてしまつた」とまとめると、①「自然への感性」と②「人生の意味」の二点を中心に、喪失の原因となつた文明の進歩に触れて全体をまとめる。

L1J

高1東大国語



会員番号	
------	--

氏名	
----	--